

府中町ふるさと歴史散策

〔第22回〕

文化財としての考古学の資料⑦

古墳時代の資料

弥生時代には多くのムラができ、ムラの中には大きな力を持った有力なムラも出来てきた。それはやがて周辺のムラを統合してクニが造られていった。

強いクニの指導者は大小の政治的首長として地域・地方を支配するようになった。そして大和の有力首長層の中から大首长（大王）が生まれてくるのであった。このような社会の大きな変化を背景に、奈良盆地の東部、三輪山の麓に箸墓という全長280mの前方後円墳が出現する。こうして弥生時代に続いて、古墳時代が始まる。

古墳時代は一般に前・中・後期の三時期に分かれ、前期は三世紀終末か四世紀初めから四世紀後代まで、中期は四世紀後代から五世紀後半の中

ごろまで、後期はそれから七世紀初頭までであったことから、飛鳥時代、奈良時代の一部にも続いたことになる。古墳は高く墳丘を盛り上げて、その内部に遺骸を納める墓で、古代中国の死者を手厚く埋葬する厚葬思想が古代朝鮮を経由してわが国へ入ったものであるため、意識的に計画性をもって造られた高塚である。

近年、弥生時代の墳丘墓や方形台状墓・方形周溝墓と呼ばれる小規模な墳丘をもつ墓が確認されているが、これを古墳と呼べないのは、墳丘規模が飛躍的に増大していること、そして墳丘の形や埋葬施設、副葬品などに地域を越えた極めて強い画一性が見られることである。それが大和王権による地域支配のシステムとしての前方後円墳を頂点とする

古墳の秩序である。

府中町にある古墳はすべて小規模な古墳で、時代も六世紀初めから七世紀にかけてのもの、つまり後期古墳ばかりで前期・中期のものは皆無である。生産力の基盤である耕地をほとんど持たないこの地の、そこそこの小首长の姿が浮かんでくる。

太田川下流域で最古クラスの古墳は、安佐北区口田南にある中小田第1号古墳、その対岸にある安佐南区緑井町の宇那木山第2号古墳（中国地方で最古級といわれる）や同じく神宮山第1号古墳がある。これらの古墳に共通するのは、いずれも全長30m前後の前方後円墳で中国製の銅鏡が副葬されていたことである。



三角縁神獸鏡

中小田第1号古墳出土

神獸鏡と獸帯鏡、車輪石、鉄斧、玉類、朱が見つかっている。また宇那木山古墳の石室から三国時代の鏡が発見されている。そして神宮山古墳からも後漢時代の鏡破片、玉類、鉄剣が出土している。

特に、三角縁神獸鏡は『府中町ふるさと歴史散歩』（第20回・7月1日号）で紹介した『魏書』烏丸鮮卑東夷伝倭人の条（略称して『魏志』倭人伝」といわれる）にある邪馬台国の女王卑弥呼が魏の皇帝から貰った銅鏡と考えられており、しかも同じ鋳型で作った鏡が京都府・大阪府・兵庫県・福岡県の古墳から出

土している。

このように古墳の存在や出土品から推測するに、太田川下流域の左岸・右岸に展開する広い地域をそれぞれ支配しただけでなく、近畿地方の勢力（大和政権）と密接な繋がりをもったかなり有力な首長が存在していたようである。

府中町文化財保護審議会会長

横田 禎 昭

問い合わせ

教育委員会生涯学習課

☎ 286-3272